

研究プロジェクト「近代精神と古典解釈：伝統の崩壊と再創造」
Research Project: The Modernity and the Studies of Ancient Texts:
the Collapse of the Traditions and their Remaking

実施期間： 2008～2010年度（3年間）

Term of the Project: 2008-2010 fiscal years (3 years)

研究代表者： 手島 純矢 国際高等研究所企画委員／元同志社大学大学院神学研究科教授

Project Leader: Dr. Isaiah (Izaya) TESHIMA, Member of the IIAS Planning Board;

Former Professor, Graduate School of Theology, Doshisha University

研究目的要旨：

ヘブライ語聖書とホメロス研究の方法論は、近代において「科学」という概念の下、大きな変容を遂げる。しかしながら、その方法論における変容は、いかなる意味で、時代を超えた価値を有するものであるか、またいかなる意味で、「近代」という特殊な時代背景において理解されるべき産物であるのか、テキスト、文脈、言語の三つの研究分野の視点から反省・検証し、21世紀、宇宙時代における古典研究の新しい形を、「科学」と「批判」概念の再構築も視野に收めながら、模索・提案する努力である。

研究目的：

①背景：

Umberto Cassuto が、19世紀に発展したモーセ五書資料説と、同時期のホメロス問題への対応とには共通した発想や学的認識が観察されることを指摘している。この指摘は、カストーが伝統的ユダヤ人研究者として科学的批判による聖書研究や古代理解に取り組む中で感じていたこと、つまり当時のヨーロッパの人文科学を支えている「科学」概念にはキリスト教神学の影響ゆえに数々の予断があるのではという彼の批判意識とも不可分である。このカストーの指摘は、ホメロス研究においても、聖書研究においても、検証されることなく今まで黙殺されてきたが、科学としての古典研究の方法論の見直しを企図するものには向き合うことを避けて通れない指摘である。

②必要性：

欧米においては、聖書研究における「ユダヤ」と「キリスト教」の思想的亀裂は深く、その亀裂を評価し論じることはきわめて難しいが、文化的背景が異なるゆえに日本のホメロス研究者と聖書研究者にとっては、虚心坦懐に、欧米のこれまでの研究史・学説史を共同で振り返る基盤づくりが、比較的容易である。従来の科研の枠組みでは、聖書とホメロスの分野を実質的につなぐことは審査の観点から難しかった。まして伝統の価値を見直し、近代欧米の古典解釈の方法論に批判的にフォーカスするという着想は、ユダヤ学が導入されてきた最近の動向であり、きわめて国際的にも最前線の問題提起であるがゆえに、このプロジェクトの追求は、ギリシアとヘブライを新たな視点で結ぶ新分野の開拓にもつながるものであり、「まず始める」というところに最大のチャレンジがあった。日本と海外の研究者、また聖書とホメロスの研究者の間に、自らの研究方法に関してコミュニケーションと相互理解が生まれることは、古典研究の刷新にとどまらず、そのまま、人間の精神にかかわる諸分野にも意味を持つ、最も本質的な形での批判的思考の言葉とは何かの追求にもつながり、それは、根本的な文字の「読解」「批判」概念を刷新する作業にも、長い目で見れば、国際的な意味でも、人文と理系を結ぶ新たな学術の「言葉」や「科学」概念を創出することにもつながるものである。

③方針：

海外からの一線の研究者や権威の代表に、プロジェクトの問題意識を共有させることができるとかが、このプロジェクトの評価と価値をそのままテストすることになる。こういう立場から、毎年、著名な4名ほどの研究者を海外から招いて討論を重ねてきた。その中では、日本側の研究者も所信を述べて、双方向的に、新たな「自己認識」のはじまりとなるように、大きな見解の統一以上に、問題認識とテーマの必然性に関する問題意識の共有に重きを置く。なぜなら問題意識の共有こそは、新しい、垣根を越えた総合的な古典研究の基盤に不可欠と考えるからである。

Objectives:

From the 19th Century to the beginning of the 20th Century in Europe, the studies of the Hebrew Bible and those of Homer underwent tremendous changes of interpretations respectively by reaching the peak of textual analysis to doubt the unity of authorship and divide the literary traditions into pieces for more coherent ideas. The present project, as inspired by U. Cassuto's insight into parallels in modern criticisms of Homer and the Bible, attempts to inquire the nature of the relationships of the modern scientific mind and the traditions in the studies of the ancient texts, i.e., to review the process of the collapse of traditional understandings in the areas of 1) Language, 2) Text, 3) Context, and redefine the achievements of the so-called "Wissenschaft" age in the light of today's discoveries and perspectives concerning the Bible and Homer.

キーワード:ヘブライ語聖書、ホメロス問題、高等批評、近代精神

Key Word: Hebrew Bible, Homeric Question, Higher Criticism, Modernity

参加研究者リスト: 17名（◎研究代表者）

氏 名	職 名 等
◎手島 純矢	国際高等研究所企画委員／元同志社大学大学院神学研究科教授
安西 真	北海道大学大学院文学研究科教授
池田 潤	筑波大学大学院人文社会科学研究科教授
池田 裕	筑波大学名誉教授
石川 立	同志社大学大学院神学研究科教授（2008年度途中より参加）
伊藤 玄吾	同志社大学言語文化教育研究センター助教
内田 次信	大阪大学大学院文学研究科教授
佐野 好則	国際基督教大学教養学部上級准教授
新免 貢	宮城学院女子大学学芸学部教授（2008年度途中より参加）
竹内 裕	熊本大学文学部准教授
西村 賀子	和歌山県立医科大学保健看護学部教授
武藤 慎一	大東文化大学文学部准教授（2009年度途中より参加）
安村 典子	金沢大学大学院人間社会研究科客員教授（2008年度途中より参加）
山田 重郎	筑波大学大学院人文社会科学研究科教授
渡辺 浩司	大阪大学大学院文学研究科助教（2008年度途中より参加）
越後屋 朗	同志社大学神学部教授（2008年度）
広川 直幸	京都大学文学部非常勤講師（2008～2009年度）

研究活動実績：

2008年度：

古典研究と近代の関係性の見直しの意義と必要性を考えるための第一回研究会において、久保正彰氏より17世紀の古典学者ヤコブス・ハイエルの先駆的本文批評の問題意識と彼の時代の空気（スピノザ他）との関連性の可能性をお聞きした。また池田裕氏の聖書学と自然（植物）の視点を結びつけることで異文化に属する人々も聖書を遺産として抱える当事者（欧米）に対して対等な発言の立場を得るという発想をお聞きした。第二回研究会では、ロフェ氏のカスト氏の業績に対する極めて俯瞰的にして詳細な評価を学ぶことができた。またティゲイ氏の経験重視のアプローチによって行われたギルガメッシュ編集の研究から、アプリオリとしてではない資料仮説のあり方が提示された。両者の発表は最終報告書に掲載予定である。第三回研究会では、京大に滞在中のケアンズ氏を招待し、アガメムノン王イメージの近代的解釈の思い込みとテキスト細部の相違についてお聞きした。いずれの研究会でも活発な意見交換がなされ、その中で、西洋古典研究と聖書研究の意外な結びつきとともに、両分野の重要な研究背景の違いなどが明らかにされた。

研究会開催実績：

第1回： 2008年5月23日～24日 （於：高等研）

第2回： 2008年8月5日～7日 （於：高等研）

第3回： 2008年11月28日 （於：高等研）

話題提供者：4名

久保 正彰 日本学士院院長・東京大学名誉教授

Alexander Rofé Professor Emeritus of Hebrew University

Jeffrey H. Tigay A. M .Ellis Professor of Hebrew and Semitic Languages and Literatures
Department of Near Eastern Languages and Civilizations
University of Pennsylvania

Douglas. L. CAIRNS Professor of Classics, School of History, Classics, and Archaeology,
University of Edinburgh

その他の参加者：8名

加藤 哲平 志同社大学大学院神学研究科大学院生
北村 徹 志同社大学大学院神学研究科大学院生
津田 一夫 志同社大学大学院神学研究科大学院生
中川 久定 国際高等研究所副所長
中務 哲郎 京都大学大学院文学研究科教授
平岡 光太郎 志同社大学大学院神学研究科大学院生
堀川 宏 京都大学大学院文学研究科大学院生
森本 恵美 関西大学大学院文学研究科大学院生

2009年度：

4月にデイヴィス教授をお招きして、古典解釈と近代の関係についてドイツでの展開とイギリスでの展開の差について伺った。イギリスの古典研究の特徴として、現実社会の格闘の中で、その自らの状況を理解するためにギリシア古典の言葉を引用する傾向があるが、これは実際的な古典研究の基礎を近代のイギリスで築いたのが政治家であったことに起因する。つまりドイツの学者は、歴史科学的な方法論の

確立に努力を傾注して古典学をきわめて閉じられた聴衆のみが理解する特別の用語の世界にしたが、イギリスでは現実社会に関わる政治家が自らの素養として古典解釈に努力したことが研究の基礎となっている。10月に村岡崇光教授をお招きして近代以前のヘブライ文法理解から何を学ぶべきか、またストア派やデカルト派が古典解釈に及ぼした影響などをお聞きした。村岡氏は、近代のヘブライ語文法学者が発見としていたヘブライ語文法のいくつかの特徴は、中世の文法学者によってすでに指摘しているという事例を踏まえて、近代の文法学の評価の見直しの必要性を述べられた。11月にお招きしたファウラー教授からは、ホメロス研究の方法論をめぐる歴史的視点の変遷について多くの示唆を得たが、中でもファウラー氏も本文批評とホメロス形成の学説の間にある恣意的な両義的な関係について認識されている点はきわめてプロジェクトにとって重要であった。

研究会開催実績：

- 第1回： 2009年4月17日～18日 (於：高等研)
- 第2回： 2009年10月23日～24日 (於：高等研)
- 第3回： 2009年11月27日～28日 (於：高等研)

話題提供者：6名

- Malcolm Davies (Dr.), Fellow and Tutor in Classics at St. John's College, University of Oxford
Robert L. Fowler, Professor, Faculty of Arts, University of Bristol
神崎 繁 専修大学文学部教授
後藤 敏文 東北大学大学院文学研究科教授
桜井 直文 明治大学法学部教授
村岡 崇光 ライデン大学名誉教授

その他の参加者：7名

- 勝村 弘也 神戸松蔭女子学院大学総合文芸学科教授
加藤 哲平 同志社大学大学院神学研究科大学院生
小堀 馨子 成城大学非常勤講師
高木 久夫 明治学院大学教養教育センター准教授
辻 圭秋 同志社大学大学院神学研究科大学院生
平岡 光太郎 同志社大学大学院神学研究科大学院生
武藤 慎一 大東文化大学文学部准教授

2010年度：

最終年度として、プロジェクトは3年かけて学んできた古典解釈の実際面と理論面の食い違いをどのように整理すべきか、どの様に今後の研究課題として問題化すべきなのかという関心から、8月と11月の2回の研究会をテキスト解釈のゼミナールとして実施し、プロジェクト参加メンバーは共通テキスト（創世記1－3章、オデュセイアなど）を設定してお互いのテキスト解釈の理論と実践を評価しあう試みをした。これは3年間の研究蓄積を個々のメンバーがどの様に消化しているのかを問うものであり、この2回の研究会の討議を通じて、報告書の概念的枠組みと整理はどのような形であるべきかについて示唆に富む討論が交わされた。個別的に言えば、8月の研究会は、古典学および文字テキスト解釈の手法と、生物学の「系統樹」「分類」（三中信宏の著作）の手法との関係について議論した。テキスト批評は分類と系統樹の手法と強いつながりが認められるが、テキストの意味解釈では必ずしもそうではない。古典解釈の多様性は、科学認識の土台となる分類と系統樹の手法を疑い否定する立場と、分類と系統樹の方法を肯定し活用する立場が衝突・共存から構成されることを確認した。11月の最終会では、

現実の古典解釈の多様性の中に息づく文学的・伝統的関心と歴史的・普遍的関心の緊張と対話が再確認され、そのパラドキシカルな古典解釈の現実は、部分と全体の関係について、人間と自然の関係について等、現代の科学・学術が学際・総合を目指すときに避けては通れない根本的な認識に新しい問題形式・視点をもたらす可能性もあること、それゆえに理系文系を超えた批判思考力の向上につながる新しい古典教育の形（つまり文字・言葉・意味に対する洞察力・解釈力・発想力を鍛え研ぎ澄ます砥石的なテキスト教育）の可能性もあることなどについて意見交換を行なった。さらに10月の研究会／シンポジウムでは、レノルズ博士の未発表のラテン語碑文の報告を中心に、テキスト解釈と考古学の関係、その文脈限定の重要性について考える機会となった。特に、論理的思考の古典解釈の形成のためには、碑文に収められた過去の情報を取り出すことに関する近代人の予断と、伝統の枠組みだけで古典テキスト解釈を行なう予断を哲学的に比較整理することが重要になるとの認識を得る。さらにシンポジウムにてレノルズ博士はご自身の古典学に関する学者人生の回想を語られ、それへの応答として桜井万里子氏より、日本の西洋古典学においてラテン語文献研究がギリシア語文献研究に比べて出遅れた原因の考察を行い、当時の時代の要請が抱いた諸偏見が西洋古典学の発展にも影響を与えた可能性をお聞きする。科学の健全な発展には、研究者自身も自ら特殊な文脈を形成していることに自覚的であること、その自らが招く特殊性を反省的に改善する努力が重要であることなど、その観点から、ヘブライ語文献の聖書研究者とギリシア語・ラテン語文献の古典研究者のみならず、隣接領域の慣習的な既成バリアを取り除く共同プロジェクトが、文系と理系の学際性の促進と併せて、重要なことを思われる。

研究会開催実績：

- 第1回： 2010年8月6日～7日 （於：高等研）
- 第2回： 2010年10月1日～2日 （於：高等研）
- 第3回： 2010年11月26日～27日 （於：高等研）

話題提供者：3名

- 浦野 聰 立教大学文学部 教授
- 桜井 万里子 東京大学名誉教授
- ジョイス・レノルズ 英国学士院会員、元ケンブリッジ大学准教授

その他の参加者：4名

- 小野 文生 京都大学大学院教育学研究科助教
- 加藤 哲平 同志社大学大学院神学研究科大学院生／日本学術振興会特別研究員
- 小堀 馨子 成城大学非常勤講師
- 師尾 晶子 千葉商科大学商経学部教授

Achievement:

2008 fiscal year:

The inauguration meeting focused upon the significance of paralleling the scholarships of the Bible and the works of Homer. Mr. Masaaki Kubo shared some new appreciation toward Jacobus Goyer's Homeric studies and discussed the significance of his work to the history of textual criticism in Homer. Mr. Yutaka Ikeda also shared his concerns about true universalism in biblical studies and lectured on the importance of the viewpoint of nature [e.g. botany] for understanding of the biblical text, claiming that the Bible was written in the same natural order under which we exist now. In the summer workshop, Mr. Alexander Rofé gave a detailed and comprehensive paper about the contributions of Umberto Cassuto to biblical studies, sharing his personal memories about him,

while Mr. Jeffry Tigay presented the merit of empirical approach to the documentary hypothesis by showing examples of the ancient marks of editorial attempts in the Gilgamesh epics. The two papers will appear in the final reports. In the autumn gathering, Mr. Douglas Cairns who was staying in Kyoto University as a guest gave a paper about changes in modern interpretations on the images of King Agamemnon, discussing gaps between the images and the details of the text.

2009 fiscal year:

During the year of 2009, the project focused upon the reexamination of the achievements of the modern scholarship in the fields of linguistic and textual from cultural perspectives. Prof. Malcolm Davies gave a lecture focusing on the characteristics of the studies of classical literature in England which tend to show keen interest in literary aspects as compared to those of Germany which developed source and textual criticisms. Prof. Takamitsu Muraoka read a paper on the importance of medieval Hebrew grammarians in light of the recent studies of the Hebrew language with a claim that medieval grammarians knew features which modern researchers consider as discoveries. Prof. Bob Fowler lectured upon the history and development of historical criticism of Homeric epics and shared with us a view that textual criticism and theories of the formations of Homeric texts are in a reciprocal relationship in which the claims of the “original” text and the preservation of the traditional text are often irreconcilable. In addition, other papers were given to report on the changes of perceptions in the Seventeenth century regarding the studies of grammar such as “Universal Grammar” or Spinoza’s Hebrew grammar, or to explain the Stoic views on Language from ancient sources and offer glimpses on the creative relationships of philosophy and philology.

2010 fiscal year:

During the year of 2010, as the final year, the project dedicated the two meetings (Aug.6-7, Nov. 26-27) for discussing the gaps of theories and actual practice in the interpretation of the Bible / Homer. By these two meetings, the project collectively endeavored to theorize on the differences of approaches through the sessions of the interpretation on the common texts (Genesis 1-3 and 22 and several texts of Homer), and considered a potential of scholarships on the Bible/ Homer beyond the ordinary scopes by exchanging opinions on the tensions of diachronic and synchronic approaches regarding the form of text or grammatical consensus or the literary assumption for exegesis and hermeneutics and by transforming the knowledge of specific interpretive difficulties into a new form of concern in field of pedagogy on logical interpretation or methodological thinking. The meeting of October 1-2 in which Prof. Joyce Reynolds gave papers was focused on the impacts of inscriptions upon the interpretations of the ancient texts. She illustrated through the studies of Latin inscriptions the significance of how the interpretive activities were influenced by the material forms of information *vice versa* how the material form of inscription (i.e., the design and order of the letters) was affected by the human mind which always demands significance in form and material. Prof. Reynolds also shared her recollections of her scholarly life in the mini-symposium for the significance of classic scholars on today’s world,. As a discussant, Prof. Sakurai Mariko gave an overview of the beginning of Japanese scholarship on the Latin classics which was then less appreciated than those of Greek. The both scholars helped to clarify the subjective and objective sides of interpretive concerns and issues. Also, Prof. Satoshi Urano, Prof. Akiko Shio, and others respectively contributed to the understanding of the issues raised by Prof. Reynolds as well as to deepening the significance of classical studies through his and her comments and discussions.

研究活動総括：

三年間の研究計画は、毎年、海外から4名の招聘学者（計12名）と国内の学者で研究を行なうというものであったが、諸般の事情から招聘の規模をほぼ半分に縮小することを余儀なくされた。しかし3年間に実施された合計9度の研究日程の中で、6度の国際的な研究日程（シンポジウムを含む）を海外からの著名な研究者7名と共に行なうことができた。毎回の研究日程には、国内の著名な研究者も専門家もPDおよび大学院生も招き、のべ参加人数200名以上で合計18日の研究日程を行なうことができた。このことでプロジェクトの目的の一つに掲げていた分野を超えた研究者の関係構築は国内のみならず国外においても出発点となるコアの部分で成し遂げられたと考えている。

西欧近代が19世紀から20世紀にかけて発展させた西洋古典学・聖書学を、伝統の崩壊と再解釈の現象として学ぶ上で、プロジェクトは本文・言語・文脈という三つの視点を掲げた。「文脈」についてはロフェ氏とティゲイ氏を招いた研究会において、20世紀初頭の聖書学者カーストの批判を歴史的に評価・批判するロフェ氏の報告と、ギリガメッシュ神話に関するテキストの異同を論じて経験的真実として資料説を考えるティゲイ氏の報告を通して、聖書学のトーラー資料説の論理的な可否について討議した。併せてホメロス研究における資料説の当否に関してファウラー氏の報告が、またホメロス研究のイギリスの近代的文脈の特異性についてマルコム氏の報告がなされた。さらに京大で在外研究をされていたケアンズ氏より近代人のテキスト解釈の偏向性の例としてアガメムノン王のイメージについての報告がなされた。聖書文学とホメロス文学が学ばれた文脈の差異及びテキスト分析の役割の差異が議論された。「文法」については村岡氏が中世以前のヘブライ文法学者と現在の文法学者の比較論の報告がなされた。しかし西洋古典学では文法の理解の変化はヘブライ語の場合ほど顕著ではないという主張を考慮して、むしろ西洋古典解釈と哲学者の言語理解の関係に注目して、神崎茂氏よりストア派の言語観について報告を、桜井直文氏よりは17世紀スピノザの友人メイエルによる哲学からの文法理解についての報告を頂いた。加えて印欧語の基本となるサンスクリット学の観点から近代人のギリシア語理解について後藤敏文氏より報告いただいた。近代の古典解釈に大きな影響を及ぼした考古学と碑文についてはレノルズ氏に報告をいただいた。以下に、現時点での、研究代表の個人的な意見を記しておく。

18世紀から19世紀にかけて古典研究者は自らの知見を「科学」の知見とするために大きな努力を払い、それが現在の西洋古典学や聖書学の土台を形成しているが、その古典学の歴史の歩みを検証し反省する努力は、これまでの自然科学に特化した「科学史」が今まで扱わなかった、もう一つの人類の批判的精神の営みの側面に光を当てる努力であり、それは従来の科学史とは区別されるべき作業である。カントに代表される近代哲学は天文学の刺激をうけて世界観の整理・統合を行ない、コント、スペンサー他の社会科学者も人間と社会の研究方法に自然科学の類概念を適用し、統計学によって社会全体の動きを捉えようとする。現在に到るまで「科学史」の関心は数値化される対象認識の論理に傾斜して、「文字」の多義性の問題に取り組む古典学者の歩みの意義には十分に着目してこなかった。古典解釈の歴史は、古き文字の意味を求める学者の努力が一元的な方法論を求めながらも、現実の文字解釈は数字のような統一的な枠組みに収まらず、見解の一致を生みにくい現実を露呈する矛盾の歴史であり、その点で、古典学の歴史＝「文字解釈」の科学史には、物理学の知見のような進歩的な総括イメージは馴染まない。それは、もう一つの「科学精神」の可能性であり、丁度、コペルニクスからニュートン物理学の登場まで、根本的な謎と矛盾を抱えながら物理学と天文学はそれぞれに併走していたが、究極的な科学認識の統一を構築する上では、「数字」を道具として獲得される科学的知見の追求と、古典テキスト解釈のような文字の意味の「批判的」追求の間には、パラドキシカルで並走的な二つの問題意識・認識原理の状況があることを意識することが肝要であると考える。

近未来社会の課題解決のための研究共同体活動の観点に立つならば、共通の世界認識の構築は喫緊の課題であり、その点で科学に寄せられる期待と要請は小さくないものがある。人間はすべからく世界的認識を「文字」と「数字」を用いて作り出し、お互いに伝達しあう以上、世界の共通認識の構築の上で、古典学のような「文字」の意味を求める思考作業がどのような方法論と論理的な問題を有している

のかを知ることは重要と思われる。古典学者の知的な営みは、所謂、自らの天才的な発見・知見を文字や数字で表現し世界の知識に加えようとする自然学者の関心とは異なり、古くから伝わるテキストを変わらずに共有し保持し続けるための努力であり、そのために判然としない古い文字の意味を十全に受け取り（=その額面の意味を疑い新しい意味を探し）、その過去の知の全てを失わずに次世代に伝えることを第一義とする。しかし「文字」は絵画であり、言葉はメタファーでもあるゆえに、文字解釈の営みは相互矛盾的に拡散的であり、数学や物理の歴史のような前進的で統一的な歴史記述には馴染まない。古典解釈の努力は「絵画」イメージである「文字」を扱うゆえに、明と闇、一義性と多義性、忘却と回顧、革新と保守など、矛盾とパラドクスに満ちた多様性の現実を促進させ、その点で古典学者はテキストを介して様々な相互に矛盾する論理的思考の現実を自己批判的に理解せねばならず、その点で古典解釈の歴史は、近代科学精神が求める統一的な正確さの世界認識に対してアンチテーゼ（良き対話相手）ともいえる。したがってプロジェクトは三年間、自覺的に、古典解釈の方法論と論理性の考察にも取り組んできた。人間自身を自然の一部として総合的な科学認識を構築するのであれば、「文字」解釈作業の困難さの認識は重要であり、文字の意味の批判的で客観的な学習は可能なのか、また「文字」の認識が「数字」の認識の足りない部分を補完することができるとするならどの様な場合なのかなど、文字と数字の性質の差に由来する認識の根本的な諸課題に対して理系・文系問わず科学者は敏感であるべきと思う。特に地球規模で未来を考える科学者は、文字と数字の論理的な矛盾を、等身大の自分の思考の姿として率直に向き合うべきだと思う。

新たな学術の芽という意味では、古典解釈の歴史（聖書とホメロスにとどまらない）に蓄積されている知恵と知見と思慮を、どの様に現在の学術の発展に還元していくかを考えるべきであろう。古典研究の歴史の見直しは、数字と文字の論理思考の差異を突き詰めていく哲学的な科学認識の問題意識の向上に役立つにとどまらない。法律の文言への批判力と解釈力を鍛える教材にも、また子供たちに言葉の意味の二極性と多面性を考えさせる国語（言語）教育の教材にも転化できる内容と思う。いずれにせよ、古典解釈の問題意識を総合的に高めて、その古典学の問題意識を学術社会全般にも繋る形で還元して、いわゆる近代西欧の哲学（集合論と自然論）の視点では十分に認識されない唯一無二の個の発想や視点を発展・展開させる文字解釈の能力向上は、最先端の科学者にも、また市民にも子供たちにも有益なものと考えている。

Whole Achievement:

The three years of the Project have reviewed the theories and interpretations of the Bible and Homer in the modern age in order to examine the critical ground of scholarships on the Bible and Homer, in particular, asking the validity of logic in arguments of particular meanings of the ancient texts by the methods of generalization. Not like natural science such as physics or mathematics, the history of interpretation of the Bible as well as Homer ultimately demands a logic which justifies the co-existence of different meanings in text; that is due to the nature of scripts as the code of commemoration and communication which is different from that of numbers as the code for counting. The 19th century *wissenschaft* of the Bible and Homer which attempts to attain the level of certainty as much as in natural science, after all, results in the present diversity of interpretive approaches which are basically split between the quest for the uniqueness of each text beyond the historical reading and the pursuit for the historicity of the ancient texts at expense of long-life traditions which gave shapes and forms to the texts and the languages of the Bible and Homer. The science in a whole sense must be aware of the logical crevasse of “numbers” and “scripts” as the means of thinking and feeling.

研究成果報告書の出版：2012年3月出版予定

担当：田中副所長

国際高等研究所
研究プロジェクト「近代精神と古典解釈：伝統の崩壊と再創造」
2008年度第1回研究会プログラム

開催日時：2008年 5月 23日（金） 14:00～17:30
5月 24日（土） 9:30～12:30

開催場所：国際高等研究所セミナー1（1F）

研究代表者：手島 獻矢 国際高等研究所企画委員／同志社大学大学院神学研究科教授
担当所長・副所長：中川 久定 副所長

出席者：（13人）

研究代表者	手島 獻矢	国際高等研究所企画委員／同志社大学大学院神学研究科教授
参加研究者 (10人)	安西 真 池田 潤 ** 池田 裕 伊藤 玄吾 内田 次信 佐野 好則 竹内 裕 西村 賀子 広川 直幸 山田 重郎 中川 久定	北海道大学大学院文学研究科教授 筑波大学人文社会科学研究科准教授 筑波大学名誉教授 同志社大学言語文化教育研究センター助教 大阪大学大学院文学研究科 教授 国際基督教大学教養学部アーツ・サイエンス学科上級准教授 熊本大学文学部准教授 和歌山県立医科大学保健看護学部教授 京都大学文学部非常勤講師 筑波大学大学院人文社会科学研究科教授 国際高等研究所副所長

**：スピーカー

話題提供者 久保 正彰 日本学士院長
(ゲストスピーカー)
(1人)

プログラム

5月23日(金)

14:00 研究会 [セミナー1]

オリエンテーション

15:00～17:30 講演及びディスカッション

話題提供者：久保 正彰 日本学士院長

演題「ヤコブス・ホイエル（1651-1689）の跡を訪ねて」

5月24日(土)

9:30 研究会 [セミナー1]

講演及びディスカッション

話題提供者：池田 裕 筑波大学名誉教授／中近東文化センター学術局長

演題「人と聖書と自然」

11:30～12:30 打合せほか

配布資料（公開不可）

- ・久保 正彰 「ヤコブス・ホイエル（1651-1689）の跡を訪ねて」
ほか

国際高等研究所
研究プロジェクト「近代精神と古典解釈：伝統の崩壊と再創造」
2008年度第2回研究会プログラム

開催日時：2008年 8月 5日（火） 14:30～17:30
8月 6日（水） 10:00～17:30
8月 7日（木） 10:00～17:30

開催場所：国際高等研究所セミナー1（1F）

研究代表者：手島 純矢 国際高等研究所企画委員／同志社大学大学院神学研究科教授
担当所長・副所長：中川 久定 副所長

出席者：（19人うち外国人2人）

研究代表者 **	手島 純矢	国際高等研究所企画委員／同志社大学大学院神学研究科教授
参加研究者 ** (16人)	安西 真 池田 潤 池田 裕 伊藤 玄吾	北海道大学大学院文学研究科教授 筑波大学人文社会科学研究科准教授 筑波大学名誉教授 同志社大学言語文化教育研究センター助教
	内田 次信 新免 貢	大阪大学大学院文学研究科教授 宮城学院女子大学学芸学部教授
	竹内 裕	熊本大学文学部准教授
	西村 賀子	和歌山県立医科大学保健看護学部教授
	安村 典子	金沢大学文学部・大学院人間社会環境研究科教授
	山田 重郎 渡辺 浩司	筑波大学大学院人文社会科学研究科教授 大阪大学大学院文学研究科助教
	中川 久定	国際高等研究所副所長
	北村 徹	同志社大学大学院神学研究科大学院生
	津田 一夫	同志社大学大学院神学研究科大学院生
	平岡 光太郎	同志社大学大学院神学研究科大学院生
	森本 恵美	関西大学大学院文学研究科大学院生

**：スピーカー

話題提供者 Alexander Rofé
(アレキサンダー・ローフェ)
(2人) Jeffrey H. Tigay
A. M. Ellis Professor of Hebrew and Semitic Languages and Literatures
Department of Near Eastern Languages and Civilizations
University of Pennsylvania

A Workshop on
“Authorships and Textual Adaptations: the Juggling of Spoken Words and Written Letters in
the Studies of the Bible and the Homer”
August, 5-7, 2008 at IIAS

8/5(Tue)

Orientation Meeting :PM2:30-5:00 (tentatively): Moderator: Yamada, Shigeo:

1. Introduction to the Project and the Workshop (30min.):by Teshima, Isaiah,
2. Self-Introduction Talk on Academic background and interest: by Prof. Tigay, Jeffrey (30min-40min): that includes autobiographical information on his teachers, the development of his own academic interests, and reflections on now and then in the academic state of biblical studies.
3. “Self-Introduction Talk on Academic background and interest”: by Prof. Rofé, Alexander (30min-40min): the same
4. Q&A (English/Japanese) on the Schedule:
The Reception dinner at IIAS beginning at 5:00PM and at 7:00PM moving to the Hotel by bus.

8/6(Wed.)

Session1:AM10:00-PM12:00: Moderator: Annnzai, Makoto

1. Takeuchi, Yu (30min): “Hebrew Bible as Literature: Robert Alter's Case”: Comment: Shinmen,Mitsugu (10min.)
2. Uchida, Tsugunobu(30min): ” Ancient Homeric Criticism and Heracleitos' Homeric Allegories”: Comment: Ysumura, Noriko(10min.)

General Discussions(English/Japanese)

Lunch/Rest PM12:00 and/or Excursion (Japanese Garden) and/or Tea break

Session 2:PM2:30-5:30(latest6:00): Moderator: Ikeda, Jun

1. Rofé, Alexander: “Umberto Cassuto and the Higher Criticism” (90min and more)
Comment: Teshima, Isaiah (total:20min)

General Discussions (English/Japanese)

8/7 (Thr.)

Session 3: AM10:00-PM12:00: Moderator: Uchida, Tsugunobu

1. Nishimura, Yoshiko (30min): "Milman Parry's Legacy"
Comment: Takeuchi, Yu(10min)
2. Annzai, Makoto (30min): "*Ilias*, 2.528-30, to be deleted"
Comment: Ito, Gengo(10min.)

General Discussions (English/Japanese)

Lunch/Rest and Teabreak: PM12:00-2:00

Session 4: PM2:00-5:30(latest6:00): Moderator: Ikeda, Yutaka

1. Yamada, Shigeo: "Mesopotamian Royal Genealogical Lists and the Narrative Expansion of the Bible: A Reflection on the Assyrian King List Tradition" (30min)
2. Tigay, Jeffrey: "The Documentary Hypothesis and Ancient Near East Discoveries" (90min)
Comment: Ikeda, Jun (20min)

General Discussions (English/Japanese)

Closing remarks: Rofé, Alexander, Tigay, Jeffrey, and Ikeda, Yutaka (Each 10min)

国際高等研究所
研究プロジェクト「近代精神と古典解釈：伝統の崩壊と再創造」
2008年度第3回研究会プログラム

開催日時：2008年11月28日（金）14:00～17:30

開催場所：国際高等研究所セミナー1（1F）

研究代表者：手島 純矢 国際高等研究所企画委員／同志社大学大学院神学研究科教授
担当所長・副所長：中川 久定 副所長

出席者：（17人）

研究代表者	手島 純矢	国際高等研究所企画委員／同志社大学大学院神学研究科教授
参加研究者 (15人)	安西 真 池田 裕 伊藤 玄吾 内田 次信 佐野 好則 新免 貢 竹内 裕 西村 賀子 安村 典子 ** 渡辺 浩司	北海道大学大学院文学研究科教授 筑波大学名誉教授 同志社大学言語文化教育研究センター助教 大阪大学大学院文学研究科教授 国際基督教大学教養学部上級准教授 宮城学院女子大学学芸学部教授 熊本大学文学部准教授 和歌山県立医科大学保健看護学部教授 金沢大学文学部・大学院人間社会環境研究科教授 大阪大学大学院文学研究科助教
	中川 久定	国際高等研究所副所長
	中務 哲郎	京都大学大学院文学研究科教授
	加藤 哲平	同志社大学大学院神学研究科大学院生
	平岡 光太郎	同志社大学大学院神学研究科大学院生
	堀川 宏	京都大学大学院文学研究科大学院生

**：スピーカー

話題提供者 (ゲストスピーカー) (1人)	Douglas. L. CAIRNS Professor of Classics, School of History, Classics, and Archaeology, University of Edinburgh
-----------------------------	---

プログラム

11月 28日(金)

14:00 研究会 [セミナー1]

開会の辞、発表者の紹介

14:20 話題提供者：渡辺 浩司 大阪大学大学院文学研究科助教
演題「アリストテレスとホメロス問題」

15:50 休憩

16:00～17:30

話題提供者：Douglas. L. CAIRNS

Professor of Classics, School of History, Classics, and Archaeology,
University of Edinburgh

演題 “Conflict and Community in the Iliad”

配布資料（公開不可）

- D. Cairns, IIAS Seminar, 2008 November 2008
- 渡辺 浩司 「アリストテレスとホメロス問題」

国際高等研究所
研究プロジェクト「近代精神と古典解釈：伝統の崩壊と再創造」
2009年度第1回研究会（通算第4回）プログラム

開催日時：2009年 4月 17日（金） 14：00～17：30
4月 18日（土） 9：30～12：30

開催場所：国際高等研究所セミナー1（1F）

研究代表者：手島 獻矢 国際高等研究所企画委員／同志社大学大学院神学研究科教授
担当所長・副所長：尾池 和夫 所長

出席者：（15人）

研究代表者	手島 獻矢	国際高等研究所企画委員／同志社大学大学院神学研究科教授
参加研究者 (13人)	安西 真 池田 潤 池田 裕 石川 立 伊藤 玄吾 内田 次信 佐野 好則 ** 新免 貢 竹内 裕 西村 賀子 安村 典子 渡辺 浩司 加藤 哲平	北海道大学大学院文学研究科教授 筑波大学人文社会科学研究科教授 筑波大学名誉教授 同志社大学大学院神学研究科教授 同志社大学言語文化教育研究センター助教 大阪大学大学院文学研究科教授 国際基督教大学教養学部上級准教授 宮城学院女子大学学芸学部教授 熊本大学文学部准教授 和歌山県立医科大学保健看護学部教授 金沢大学文学部・大学院人間社会環境研究科教授 大阪大学大学院文学研究科助教 同志社大学大学院神学研究科大学院生

**：スピーカー

話題提供者 Malcolm Davies
(ケンブリッジ)
Fellow and Tutor in Classics at St. John's College, University of Oxford
(1人)

プログラム

4月17日（金）

14:00～17:30 研究会〔セミナー1〕

テクスト解釈および受容研究の方法論をめぐって

講演及びディスカッション

Mitsugu Shinmen, "The AM HA AREZ Question and Jewish-Christian Dialogue"

Malcolm Davies, 'Folk-tale vestiges in the second half of the Odyssey'.

respondent: Noriko Yasumura

respondent: Yutaka Ikeda

4月18日（土）

9:30～11:30 研究会〔セミナー1〕

古典テクストの受容・翻案をめぐって

講演及びディスカッション

Malcolm Davies, "Charles James Fox and Heracles in Homer".

respondent: Yoshinori Sano

respondent: Jun Ikeda

11:30～12:30 打ち合わせほか

配布資料（公開不可）

・新免 貢 "The AM HA AREZ Question and Jewish-Christian Dialogue"

国際高等研究所
研究プロジェクト「近代精神と古典解釈：伝統の崩壊と再創造」
2009年度第2回研究会（通算第5回）プログラム

開催日時：2009年 10月 23日（金）14：30～17：30
10月 24日（土）10：00～16：00

開催場所：国際高等研究所 216号室（2F）

研究代表者：手島 純矢 国際高等研究所企画委員／同志社大学大学院神学研究科教授
担当所長・副所長：尾池 和夫 所長

出席者：(22人)

研究代表者	手島 純矢	国際高等研究所企画委員／同志社大学大学院神学研究科教授
参加研究者 (18人) **	安西 真 池田 潤 石川 立 伊藤 玄吾 内田 次信 佐野 好則 新免 貢 竹内 裕 西村 賀子 安村 典子 山田 重郎 渡辺 浩司	北海道大学大学院文学研究科教授 筑波大学人文社会科学研究科教授 同志社大学大学院神学研究科教授 同志社大学言語文化教育研究センタ助教 大阪大学大学院文学研究科教授 国際基督教大学教養学部上級准教授 宮城学院女子大学学芸学部教授 熊本大学文学部准教授 和歌山県立医科大学保健看護学部教授 金沢大学文学部・大学院人間社会環境研究科教授 筑波大学大学院人文社会科学研究科教授 大阪大学大学院文学研究科助教
	高木 久夫 武藤 慎一	明治学院大学教養教育センター准教授 大東文化大学文学部准教授
	勝村 弘也 加藤 哲平 辻 圭秋 平岡 光太郎	神戸松蔭女子学院大学総合文芸学科教授 同志社大学大学院神学研究科大学院生 同志社大学大学院神学研究科大学院生 同志社大学大学院神学研究科大学院生

**：スピーカー

話題提供者 (ゲストスピーカー) (3人)	神崎 繁 桜井 直文 村岡 崇光	専修大学文学部教授 明治大学法学部教授 ライデン大学名誉教授
-----------------------------	------------------------	--------------------------------------

プログラム

10月23日（金）

14:30 プロジェクトの趣旨説明（手島勲矢）と出席者の自己紹介

14:50 話題提供者：神崎 繁 専修大学文学部教授

演題「命令と勧告：道徳的発達と言語行為の相関について」

15:50 休憩

16:00 話題提供者：桜井 直文 明治大学法学部教授

演題「スピノザとマイエルにおける文法への関心」

17:00～17:30 討論（コメンテータ：内田次信）

10月24日（土）

10:00 話題提供者：村岡 崇光 ライデン大学名誉教授

演題「日本人として聖書語学にかかわって来た途上人」

10:30 話題提供者：池田 潤 筑波大学人文社会科学系教授

演題「近代言語学とヘブライ語研究」

11:30 討論（コメンテータ：村岡崇光）

12:00 昼食

13:00 話題提供者：村岡 崇光 ライデン大学名誉教授

演題「前近代のユダヤ人学者からヘブライ語学について

学ぶところがあるだろうか？」

14:00 討論（コメンテータ：池田潤）

15:00～16:00 総括討論：古典語研究と近代（司会：手島勲矢）

国際高等研究所
研究プロジェクト「近代精神と古典解釈：伝統の崩壊と再創造」
2009年度第3回研究会（通算第6回）プログラム

開催日時：2009年 11月 27日（金）14:00～17:30
11月 28日（土）10:00～16:30

開催場所：国際高等研究所 216号室（2F）

研究代表者：手島 獻矢 国際高等研究所企画委員／同志社大学大学院神学研究科教授
担当所長・副所長：尾池 和夫 所長

出席者：(15人)

研究代表者	手島 獻矢	国際高等研究所企画委員／同志社大学大学院神学研究科教授
参加研究者 **	安西 真	北海道大学大学院文学研究科教授
(12人)	池田 潤	筑波大学人文社会科学研究科教授
	池田 裕	筑波大学名誉教授
	伊藤 玄吾	同志社大学言語文化教育研究センタ助教
	佐野 好則	国際基督教大学教養学部上級准教授
	新免 貢	宮城学院女子大学学芸学部教授
	竹内 裕	熊本大学文学部准教授
	西村 賀子	和歌山県立医科大学保健看護学部教授
	武藤 慎一	大東文化大学文学部准教授
	安村 典子	金沢大学文学部・大学院人間社会環境研究科教授
	渡辺 浩司	大阪大学大学院文学研究科助教
	小堀 馨子	成城大学非常勤講師

**：スピーカー

話題提供者 Robert L. Fowler Professor, Faculty of Arts, University of Bristol
(ケンブリッジ) 後藤 敏文 東北大学大学院文学研究科教授
(2人)

プログラム

11月27日(金)

14:00 報告書の作成に向けての相談会

司会：池田 潤、佐野 好則

提案者：竹内 祐、西村 賀子

15:00 休憩

15:10 司会：山田 重郎

話題提供者：後藤 敏文 東北大学大学院文学研究科教授

演題「文献研究と文法研究—ヘシオドス『神統記』に現れる

elephairomai の解釈を例として」

コメンテーター(1人10分)：池田 潤、渡辺 浩司、伊藤 玄吾

17:10～17:30 全体討論

11月28日(土)

10:00 司会：佐野好則

話題提供者：安西 真 北海道大学大学院文学研究科教授

演題「ホメロス研究における分析論とヘシオドス『農と暦』の

いわゆる 5 時代の説話について」

11:00 休憩

11:20 司会：安西 真

話題提供者：Robert L. Fowler Professor, Faculty of Arts, University of Bristol
演題“Self-introduction, and my view on "Classical Study Today"”

11:50 昼食

13:15 司会：安村典子

話題提供者：Robert L. Fowler Professor, Faculty of Arts, University of Bristol
演題“Homer and the Epic Tradition”

14:45 休憩

15:00～16:00 全体討論(司会：手島勲矢)

国際高等研究所
研究プロジェクト「近代精神と古典解釈：伝統の崩壊と再創造」
2010年度第1回研究会（通算第7回）プログラム

開催日時：2010年 8月 6日（金）13:00～22:00
8月 7日（土）10:00～15:00

開催場所：国際高等研究所セミナー1（1F）、セミナー2（2F）
けいはんなプラザ会議室「木津川」「アルノ」（5F）
619-0237 京都府相楽郡精華町光台1丁目7番地

研究代表者：手島 勲矢 国際高等研究所企画委員／元同志社大学大学院神学研究科教授
担当所長・副所長：田中 成明 副所長

出席者：（14人）

研究代表者	手島 勲矢	国際高等研究所企画委員／元同志社大学大学院神学研究科教授
参加研究者 **	安西 真	北海道大学大学院文学研究科教授
(13人)	池田 潤	筑波大学大学院人文社会科学研究科教授
	池田 裕	筑波大学名誉教授
	伊藤 玄吾	同志社大学言語文化教育研究センター助教
	内田 次信	大阪大学大学院文学研究科教授
	佐野 好則	国際基督教大学教養学部上級准教授
	新免 貢	宮城学院女子大学学芸学部教授
	竹内 裕	熊本大学文学部准教授
	西村 賀子	和歌山県立医科大学保健看護学部教授
	武藤 慎一	大東文化大学文学部准教授
	安村 典子	金沢大学大学院人間社会研究科客員教授
	渡辺 浩司	大阪大学大学院文学研究科助教
	加藤 哲平	同志社大学大学院神学研究科大学院生 日本学術振興会特別研究員

プログラム

8月 6日（金）

13:00 合同会（導入）

司会：西村賀子

発題：伊藤玄吾、手島勲矢、渡辺浩司

15:00 休憩

15:30～17:30

分科会（テクスト講読1） ホメロス班、旧約聖書班

20:00～22:00

分科会（テクスト講読2） ホメロス班、旧約聖書班

8月7日（土）

10:00 分科会（テクスト講読3） ホメロス班、旧約聖書班

12:00 昼食

13:00~15:00

合同会（総括）

司会：池田 潤

発題：池田 裕、安西 真

国際高等研究所
研究プロジェクト「近代精神と古典解釈：伝統の崩壊と再創造」
2010年度第2回研究会（通算第8回）プログラム

開催日時：2010年 10月 1日（金）14:00～17:30
10月 2日（土）10:00～17:00

開催場所：国際高等研究所セミナー1（1F）、
10月 2日（土）午後のみ 216号室（2F）

研究代表者：手島 純矢 国際高等研究所企画委員／元同志社大学大学院神学研究科教授
担当所長・副所長：田中 成明 副所長

出席者：(18人)

研究代表者	手島 純矢	国際高等研究所企画委員／元同志社大学大学院神学研究科教授
参加研究者 (14人)	安西 真 池田 裕 伊藤 玄吾 内田 次信 佐野 好則 新免 貢 竹内 裕 西村 賀子 武藤 慎一 安村 典子 渡辺 浩司 小野 文生 小堀 馨子 師尾 晶子	北海道大学大学院文学研究科教授 筑波大学名誉教授 同志社大学言語文化教育研究センター助教 大阪大学大学院文学研究科教授 国際基督教大学教養学部上級准教授 宮城学院女子大学学芸学部教授 熊本大学文学部准教授 和歌山県立医科大学保健看護学部教授 大東文化大学文学部准教授 金沢大学大学院人間社会研究科客員教授 大阪大学大学院文学研究科助教 京都大学大学院教育学研究科助教 成城大学非常勤講師 千葉商科大学商経学部教授
話題提供者 (3人)	浦野 聰 桜井 万里子 ジョイス・レイノルズ	立教大学文学部 教授 東京大学名誉教授 英國学士院会員、元ケンブリッジ大学准教授

プログラム

10月1日（金）

- 14:00 趣旨説明
- 14:10 研究会メンバーの自己紹介
- 14:40 レイノルズ先生の自己紹介
- 15:10 休憩
- 15:30 レイノルズ先生の研究発表（司会：安村典子）
- 16:30 コメント（浦野先生とレイノルズ先生の議論）
- 17:20～17:30 参加者からの質疑応答

10月2日（土）

- 10:00 研究発表：武藤慎一
- 11:00 コメント：伊藤玄吾
- 11:30 質疑応答
- 12:00 昼食

13:00 講演会

第Ⅰ部（13:00～14:35）

講演 “Becoming an Epigraphist in the Twentieth Century”
「20世紀における碑文学者としてのわが歩みをふりかえって」

講師 ジョイス・レイノルズ（英国学士院会員、元ケンブリッジ大学准教授）
応答者：桜井万里子（東京大学名誉教授・古代ギリシャ史）

第Ⅱ部（15:00～17:00）

座談会 ジョイス・レイノルズ
池田 裕（筑波大学名誉教授・旧約聖書学）
桜井万里子（東京大学名誉教授・古代ギリシャ史）
内田 次信（大阪大学大学院文学研究科教授・西洋古典学）
竹内 裕（熊本大学文学部准教授・旧約聖書学/倫理学）
司会・安西 真（北海道大学大学院文学研究科教授・西洋古典学）

国際高等研究所
研究プロジェクト「近代精神と古典解釈：伝統の崩壊と再創造」
2010年度第3回研究会（通算第8回）プログラム

開催日時：2010年 11月 26日（金）14:00～21:00
11月 27日（土）10:00～15:00

開催場所：国際高等研究所 216号室（2F）、11/26 分科会は、セミナー2も使用 11/27 分科会は、
会議応接室も使用
けいはんなプラザ会議室テムズ（5F）

研究代表者：手島 純矢 国際高等研究所企画委員／元同志社大学大学院神学研究科教授
担当所長・副所長：田中 成明 副所長

出席者：(13人)

研究代表者	手島 純矢	国際高等研究所企画委員／元同志社大学大学院神学研究科教授
参加研究者 (12人)	安西 真 池田 潤 石川 立 伊藤 玄吾 佐野 好則 新免 貢 竹内 裕 西村 賀子 武藤 慎一 安村 典子 山田 重郎	北海道大学大学院文学研究科教授 筑波大学大学院人文社会科学研究科教授 同志社大学大学院神学研究科教授 同志社大学言語文化教育研究センター助教 国際基督教大学教養学部上級准教授 宮城学院女子大学学芸学部教授 熊本大学文学部准教授 和歌山県立医科大学保健看護学部教授 大東文化大学文学部准教授 金沢大学大学院人間社会研究科客員教授 筑波大学大学院人文社会科学研究科教授
	小野 文生	京都大学特定助教（グローバルCOE）大学院教育学研究科

プログラム

11月 26日（金）【216号室】

14:00 合同会1（報告書に関する打ち合わせ）
進行： 池田 潤
15:00 休憩
15:15 分科会1（テクスト講読）【216号室・セミナー2】
ホメロス班：ヘシオドス『神統記』『仕事と日』より
進行： 佐野 好則
発題者： 伊藤 玄吾・安西 真
旧約聖書班：創世記 1-3章
進行： 竹内 裕
発題者： 手島 純矢・山田 重郎・池田 潤
17:15 終了

18:00 夕食

19 : 00 合同会 2 (分科会 1 に関する横断的討議) 【けいはんなプラザ会議室テムズ】

進行： 西村 賀子

発題者： 佐野 好則・新免 貢

21 : 00 終了

11月 27日 (土) 【216号室・会議応接室】

10 : 00 分科会 2 (テクスト講読) 【216号室・会議応接室】

ホメロス班：『イーリアス』24巻

進行： 西村 賀子

発題者： 安村 典子・渡辺 浩司

旧約聖書班：創世記 22章

進行： 池田 潤

発題者： 石川 立・竹内 裕・武藤 慎一

12 : 00 昼食 【コミュニティホール】

13 : 00 合同会 3 (分科会 2 に関する横断的討議) 【216号室】

進行： 佐野 好則・竹内 裕

発題者： 西村 賀子・池田 裕

15 : 00 終了

国際高等研究所
研究プロジェクト「近代精神と古典解釈：伝統の崩壊と再創造」
研究成果取りまとめ会合 2011 年度第 1 回プログラム

開催日時：2011 年 9 月 17 日（土）10：00～17：00

開催場所：開催場所：国際高等研究所セミナー 1 (1F)

研究代表者：手島 勲矢 元同志社大学大学院神学研究科教授
担当所長・副所長：田中 成明 副所長

出席者：(5 人)

研究代表者	手島 勲矢	元同志社大学大学院神学研究科教授
参加研究者 (メンバー) (4 人)	池田 潤 竹内 裕 西村 賀子 渡辺 浩司	筑波大学大学院人文社会科学研究科教授 熊本大学文学部准教授 和歌山県立医科大学保健看護学部教授 大阪大学大学院文学研究科文化表現論専攻助教

プログラム

9 月 17 日（土）

10：00	報告書作成について①
12：00	昼食
13：00	報告書作成について②
17：00	終了